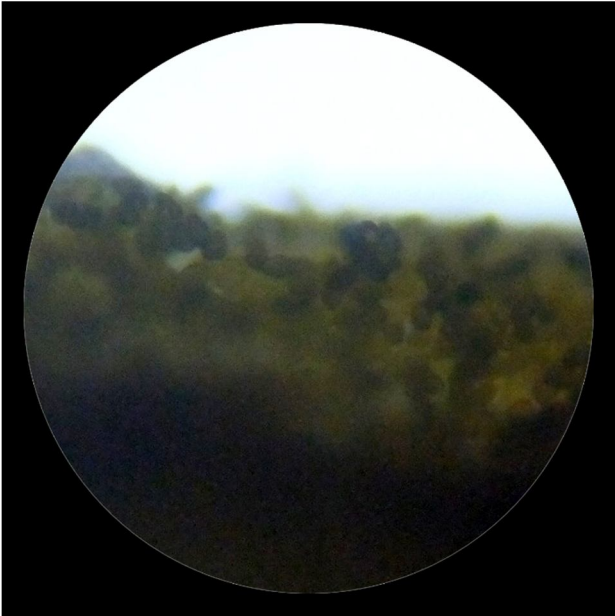


「5年・キンモクセイの花粉(2)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

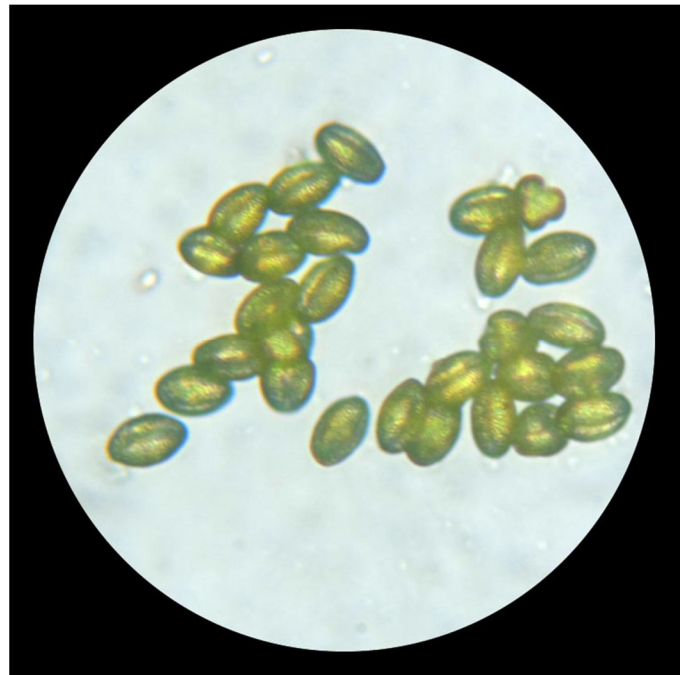
大学構内のキンモクセイは「雄花」しかない。雄花だから、花粉があるはずである。



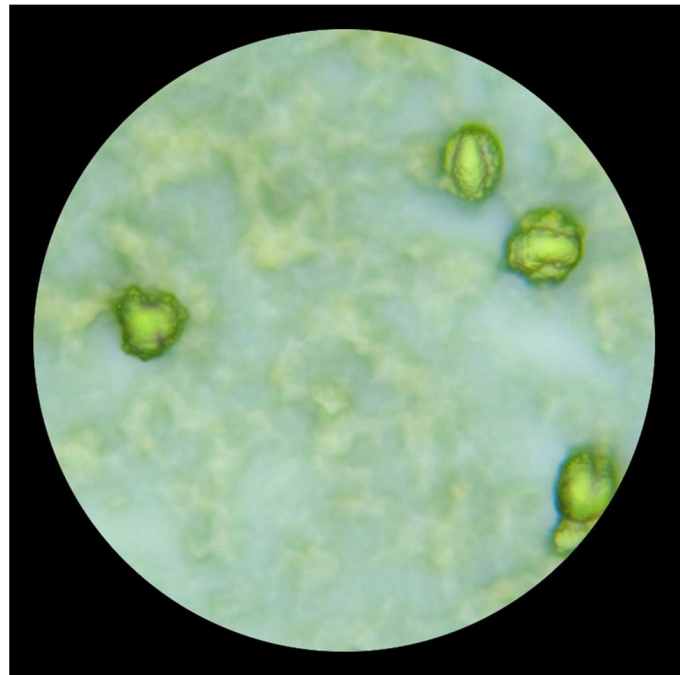
これは、葯(おしべの先端)の透過光写真である。(×100) 光量を上げると、次第に花粉の粒らしきものが見えてきた。最初、私も子どもたちも、ピンセットで取った葯を、スライドに押し付けるようにして花粉を見ようとしていた。しかし、その方法ではあまり良い結果は得られなかった。



子どもたちと色々な方法を試すうちに、一輪の花の葯を押し付けるよりも、写真のように、花のついた枝を、軽くスライドに叩く方法が一番良いことがわかった。こうすると、葯の表面や内部の花粉が、効率よくスライド上に落ちるのだ。



これが、この日のベストショットだった。この花粉の顕微鏡をセットしたのは、花粉の大きさを最後まで測定できなかった男児で、面目を一新した。写真は倍率400倍だが、長径は0.03mmほどしかなく、風媒花粉と大差ない。キンモクセイは見るからに虫媒花であるが、この程度の大きさしかない理由がわからない。



更に不思議なことに、ある子どもは、こんな変わった形の花粉も発見した。同じキンモクセイの花粉とは思えない。全く、謎の多い植物である。